

III 無土器時代の問題点

石垣島西海岸の名蔵湾に面して無土器時代の貝塚が点在している。これらの各貝塚の炭素14測定年代などを見ると、名蔵湾の東南の名蔵貝塚群の第二地点^①(九四五±七五年BP)や湾の内陸部の神田貝塚^②(九四〇±六五年BP)、湾奥のフーネ第二貝塚^③(九六〇±七五年BP)、名蔵湾の西北の崎枝赤崎貝塚群^④(「開元通寶」)八世紀〜九世紀頃が三枚出土)など、得られた年代はほとんど近似的である。しかし、遺跡の範囲や規模の大小、包含層の厚さ、共伴遺物などには著しい違いがある。一方で、名蔵貝塚群の第二地点^①筆者第三地点(九四五±七五年BP)と第五地点^⑤筆者第一二地点(二二〇〇±九〇年BP)においては、年代差にもかかわらず共伴遺物に違いは見られない。ただ、炭素14測定が行なわれたのは遺跡の一部にすぎず、シャコガイ製貝斧が集中して出土した附近での測定は行なわれていない。つまり、名蔵貝塚群の年代の上限が更に遡る可能性は未だに否定できない。

また、カーボン測定に貝斧の素材のシャコガイを用いることには問題がある。シャコガイ製貝斧のほとんどが化石状のシャコガイの死貝を用

いているとすれば、炭素14測定年代が示すのは、生貝の殻を用いて貝斧が作られた年代ではなく、化石化した貝が死んだ時期を示すことになる。無土器時代の貝塚には貝斧を製作するために死亡年代の異なるシャコガイを持ち込んだ可能性がありシャコガイを用いた炭素14法測定年代の評価に関しては特に慎重を要する。

さらに、これらの遺跡においては食料残渣と共伴遺物などの多少や石器・貝製品・骨製品の有無などがある。包含層が薄いために大型農業機械(トラクター等)による耕起などでほとんどが攪乱していて層位的な編年が難しい。また、土器が確認されなため土器型式による編年は不可能である。残された唯一の方法は、炭素14測定法の年代による物理化学的測定であるが、先述したようにそれについても、貝殻や木炭などのサンプリングの方法、その他技術的な問題を抱えている。資料の扱い方やその解釈については、今後とも議論を重ねる必要がある。

シャコガイ製貝斧の形態^⑤や製作技法はフィリピンと同一である。シャコガイ製貝斧文化圏はシャコガイの棲息分布と密接な関係があると思われる。貝斧の素材のオオシャコガイの北限は、『沖縄歴史地図・考古編^⑥p.58』(柏書房)によると、フィリピンから台湾の東海岸を通じて宮古・八重山諸島の西岸を経て徳之島に至る線以南に分布している。沖縄本島の具志川市の地荒原貝塚^⑦・久米島の北原貝塚^⑧と清水貝塚^⑨、伊江村の具志原貝塚^⑩などからもシャコガイ製貝斧が出土しているけれども、これらは類例も少なく、かつ、フィリピンや先島諸島で発見されるシャコガイ製貝斧とは形態が違っている。八重山を中心としたシャコガイ製貝斧文化

圈とは異質の要素からなっている。

砂岩の扁平な破片が火を受けて赤く焼けている焼石の利用は、赤色土器時代や無土器時代の下限の一二世紀頃まで行なわれていた。そのため、南島考古学者の三島格氏^①は赤色土器時代と無土器時代の両者の石器のアッセンブリッジ（組成）が共通していることから無土器の貝塚を有土器遺跡（赤色土器文化）の出先のキャンプ地ではないかと述べている。けれども筆者の知見によれば、無土器時代の石斧のアッセンブリッジには豊富な石材を用い、石斧はより入念に研磨され、研磨面の広がりなどにも歴然とした違いがある。

出先キャンプを設けることは無土器時代から近代にかけて行なわれたと思われる。現在でも浜下りや潮干狩りなどの後に、浜辺で魚貝類の解体作業（貝肉などの抜き身等）を行ない、残滓の貝殻を浜辺一帯に捨てることがある。焼石はその際、石むし焼き調理に使われた



写真1 無土器時代の貝塚に最近捨てられたオトメイモガイ（嘉良嶽貝塚にて）

と考えられる。郷土史家宮良賢貞氏は「最近でも島の人々は、石を集めてその上で火をたき、炎が静まったところで、焼石の上に魚を葉に包んで置いて焼き、また焼石の上にホラ貝で湯をわかす^②」と述べている。これらの貝塚の中には、無土器時代からスク時代、近世に至るまで出先キャンプ地的に利用されたものもあったと思われるので検討が必要であろう。

これらの無土器時代の貝塚のほとんどが石垣島や西表島にある。また、海岸低地の砂丘地跡での貝塚形成を考察すれば、蛋白源としての貝肉への依存度は比較的高かったことが予想される。造船木工具だと推定されるシャコガイ製貝斧や柱状ノミ型磨製石斧、船のイカリ用の大型石錘の存在などから漁撈が主体であったと思われる。しかも隆起珊瑚礁からなる竹富島、黒島、上地島、下地島、鳩間島、由布島、嘉弥真島、波照間島、宮古島、伊良部島、下地島、来間島、池間島、大神島、多良間島、水納島などは、裾礁（リーフ）が発達し、有用貝類が多数生息し海の幸に恵まれているが、今のところこれらの島々には、無土器時代の貝塚が意外に少ない。（前述の「第1章総論」のなかの2先島文化圏の自然環境の項の「表2先島文化圏の島々（有人）の先史・原史時代の遺跡数」を参照）

また、オセアニア地域でよくみられる釣針や鉞などの骨製品^③が全く発見されていない。そのことから無土器時代の遺跡においても、食料源としての海産資源への依存と並行して、山の幸である果実やヤマイモ、イノシシなどへの依存度も高かったことが予想される。水源、土壌、植生などの亜熱帯気候の自然条件の下で照葉樹林の焼畑農耕^④などが行なわれ

た可能性も考えられよう。

無土器とはいっても、生活に供する何らかの容器は必要だったろう。今後、貯蔵、運搬などの目的で土器の代わりに、葉（クワズイモ、バシヨウ、クバ、ハマユウ等）、貝殻、竹籠、革袋などを使用したことも考慮する必要がある。

八重山の無土器文化の様相は複雑である。八重山の無土器文化の解明には物質文化を扱う考古研究者のみではなく、地質研究者や生態研究者などを含めた広い視野からのアカデミックな研究が必要であると考ええる。

IV 名蔵貝塚群をめぐる問題点

無土器文化を考える上で貴重な資料である名蔵貝塚群について考察する。

名蔵貝塚群は無土器文化を代表する貝塚である。同遺跡出土のものと類似する遺物を求めて周辺地域に目を転じてみると、台湾の先史文化には同様な遺跡・遺物はないが、フィリピンなどの南方文化（黒潮文化）や中央・東ミクロネシアの先史文化のなかにそれを見ることができると。

名蔵平野の南端では前勢岳の北東から大川堂川が山麓を流れてバギナーの田地を通りクードー浜に注いでいる。この大川堂川の海岸寄りの架橋から道路に沿って北へ向かい、ハイガー（南の川）を通り、於茂登岳を水源として流れる名蔵川（ノーラカラ）の中流にかけて広がる名蔵平野の氾濫原（低湿地帯）のなかにある標高一〜三メートルの低砂台地上に形成されて棒状を呈する貝塚群が名蔵貝塚群である。

低砂台地は大川堂川架橋あたりから、道路に沿って弧状に延々と一千九百メートル以上続いており、自然堆積の海砂利層（白黄色層）、腐植土層（黒褐色層）、包含層（黒色層Ⅱ生活層）などが入り組んで一五カ